

全国学校図書館研究会 ご報告 その1

子供のころ、夏休みの宿題で一番嫌だったのが読書感想文でした。感想文を書くために一冊読んで、あらすじを書いて、感動しました、なんて書いていました。そこで、今更ながら「読書感想文の指導」という分科会に参加しました。

一人目の発表者は、兵庫県立豊岡市立神美小学校の井上緑子先生です。ここでは、所属校の齋藤恭子校長先生のコラムが興味深かったので、紹介します。(具体的な指導については、以前、学校図書館顧問の藤田氏の資料を紹介してありますので、そちらを参考にしてください。)

どんどん貯まるって、楽しいね

豊岡市の子どもたちは、一年間に50冊の本を読もうと、「チャレンジ50」に挑戦しています。達成すると教育委員会からいただく『がんばりましたね』の賞状も楽しみなのですが、子どもたちは、読書カードにどんどん本の題名が記入されて、まるで貯金通帳のように読んだ本が貯まっていくこと、これもとっても楽しみなようです。

たくさん書き込んだ本の題名を見ながら、「この本はおもしろかった」「あ、その本私も読んだよ」「僕も読んでみようかな」そんな会話が弾みます。**読書の記録は読書の記憶となって、本からのメッセージをいつまでも心に残してくれるようです。**

こうして貯まった本の記録を見ながら、一番心に残っている一冊を選んで読書感想文を書くといいなと思います。

読書感想文はきっと、そのときの自分自身をはっきりと映し出します。読書感想文を書きながら自分自身を見つめ直すことにもなります。そうして、その本は、そのときを象徴する大事な一冊となって一生、心に残ることでしょう。(以下省略)

感想文は「心の成長の記録」です！

「よし、この感動を感想文に書き表そう！」そう決めたら、

- 1 まず、紙と鉛筆を用意して、表紙をじっくり見ましょう。そして、感じたこと、発見したことをメモします。ついでに裏表紙も見ましょう。ここでも何か感じたらメモです。
- 2 それから本を開きましょう。もう一度ゆっくり読み返しながら、心に浮かんだことをどんどん用紙に書きます。「へえ、そうなんだ」「どうして?」「困ったね」「僕ならどうする」
- 3 書き上げたメモを分類し(疑問、感動、発見、想像、反省、期待…)、書き表したいことの中心(この感想文のテーマとなる)を決めます。
- 4 テーマを核にして、文章の構成を考えます。
- 5 下書きを音読しながら推敲(もっと適切な言葉・表現はないか、文末表現はどうか、接続詞は適切か…)し、前書きと後書きを考えます。
- 6 募集規定(字数、書き方など)に合わせて点検し、清書します。

こうして書き上げた読書感想文は、自分自身を映し出す「心の成長記録」です。

かつて、「蜘蛛の糸」を読んで読書感想文を書いてことをきっかけに、「杜子春」「羅生門」と、結局中学校三年間、芥川龍之介の本を読み続けた生徒がいました。彼は芥川作品を通して今の自分を見つめ、未来を想像し、生き方を考えていきました。**一冊の本との出会いと、感想文への取り組みの姿勢が、ものの見方、考え方を広げ、深めていったのでした。**

私も子供のころ、こんな素晴らしい指導と出会っていたら、人生変わっていたかもしれません。

全国学校図書館研究会 ご報告 その2

読書感想文のもう一人の発表者は、佐賀県上峰町立上峰中学校の吉岡晃子先生です。2人に共通していたことは「まず優れた感想文を読みあうこと、次に選書に時間をかけること、読書メモの工夫をすること、書かせたままにしないこと、感想文を発表しあうこと、最後に推敲・書き直しを惜しまないこと」など。『感想文を書くことで、自分を見つめ直す』ことを強調していました。

国語における「読書感想文を書くヒント」の授業

- 1 「蟬の声」(浅田次郎著)を読んで、読書感想文の最初の部分を書く。
 - ・ 祖父は、なぜ老人ホームに入ろうとするのか。
 - ・ なぜ、戦争の話は内緒なのか。 和男の使命とは何なのか。
- 2 「高瀬舟」(森鷗外著)を読んで、読書感想文の最後の部分を書く。
 - ・ 私はこの本を読んで、「 」ということを学んだ。
 - ・ 喜助は、弟を死なせた。この行為は・・・。
 - ・ 庄兵衛は喜助の話から、「満足する」ことの難しさについて考える。私は、「満足」とは…。
- 3 最後に、読み手(審査員)を意識した文章構成に直す。
 - ・ 書き出しの部分と、まとめの部分を入れ替える。つまり、結論を先に述べる。
 - ・ あらすじや引用などは、基本的に書かない。感想文ではなく本の紹介になってしまうので。

国語における「読書感想文を書く手順」の授業

手順1 学校図書館で本を選ぶ (省略) 手順2 本を読む (省略)

手順3 項目ごとに分けて書く

次の★をそれぞれ別の原稿用紙に書いてみよう。

- ★ 初めて知ったこと、**意外だったこと**を書く。
- ★ **自分の体験**と本の内容を結びつけたり、比べたりして書く。
- ★ この本を読んで気づいた自分の気持ちや、**自分の変化**を書く。
- ★ この**本の主題**を考えて書く。

手順4 文の構成を決める

手順3 で書いた原稿用紙を、順番を変えながら並べてみる。

書き出しにはどれをもってもよいが、「主題」を最初に置くと、勢いが出ることが多い。

また、最初に「主題」を置くと、最後にもう一度繰り返して強調することもできる。

字数が規定に足りない場合は、致命傷になってしまう。その場合はあらすじを入れてもよい。

「読書感想文 楽しんで攻略」より

(抜粋)

朝日新聞 平成24年7月28日「子どもの本棚」
宮川俊彦(教育評論家 国語作文教育研究所・主宰)

感想文に決まりはない。題名、表紙、イラスト、字の大きさ、気に入ったセリフ。どれか一つについてだけ書いたっていい。ただ、「自由に書いていいんだよ」は逆効果になることがある。子どもは戸惑い、どうしたらいいか分からなくなるかもしれない。

文章にはいろいろな工夫ができる。僕は、30年くらい前から、「な・た・も・だ」を使ってみようと言ってきた。「なぜなら」「たとえば」「もしも」「だから」の順に文章を書いて、最後に自分の意見をはっきりと記す。これは、あくまでも書き始めるためのヒントである。たとえば、

- ・ 物語の主人公を、自分に置き換えてみる。自分を客観的に捉えると、表現方法が豊かになる。
- ・ 感想文に適している本は、繰り返して読み返した本だ。
- ・ 読んで面白くなくても、「何だこれ」と疑問がう感が本の方が書きやすいことだってある。
- ・ 親は指導ではなく鑑賞者になろう。私はこう思ったと、子どもが分析するのを手伝ってほしい。